

現代に於ては、映画の題名ではないが戦前の如く「未

は博士か大臣か」というような大志はないのである。この事は、良く云へば現実的であつて、悪くいへば小市民的ともいえるのである。このように現実的になつてきた事は結構であるが、余りにも現実的に走り過ぎたきらいがある。(ここで我々はもう一度考へ直さなければならぬ)のではなからうか。幸にして仏教を勉強しているが、この適当な環境を利用して何か一つ身につけて行きたいものである。

インターネット掲載許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 差を取る

堀江環

先日、知恩院大殿における音楽法要の後のお話しの中で、「悟り」とは「差を取る」とことであると力説されたが、そのものズバリだと思ふ。

「速転」というスピードアップも大事であるが、ムリな追越しは避けたいと思う。前の車を追越して差をつけようとするから、そこに無理が生えてくるのである。狭いところでは前の車に従つて、おのずと前進していくことが、今の世面に必要である。

そこに和順の精神が生かされて、奥の平和が確立されていくのではないか!!

## 法然上人を拝跪す

佐藤蒼夫

去れ上人を思慕のなり宗教家と思ひ、淨土宗を田舎の爺さん婆さんの京内のように思つた人がある。(これは誤解の甚しいものであろう。しかしこの誤解は由来するところがないでもない。

上人は人向の思想というものはどんな大思想家のものとても結局は、真理から見れば貧困極まるものだと知つ

て、まず自分の思想を惜しげもなく抛つて他のすべての思想をも否定してかかった。上人は思想のなり人ではなく、思想の無価値を認識した大思想家である。万物の靈長とか、神に似せて人が創られたとかいう人間のつめばれを打破した大思想をその行法としたためにその宗旨が田舎の爺さん婆さんのもののように見えるのである。

上人はフリードリッヒ・ニーチェと同じく価値転換を行つた思想的超人で、その思想があまりに巨大なるがために平俗な思想家の眼には上人が恰も思想がなり人のように映ずるだけのことで、思想を無視し超越するような革命的な大思想家法然を先づ知ることが淨土門を理解する才一ではなからうか。

人間の思想はひかに偉大であろうとも人間のものである限り、頼むに足りないという悲しささびしさの結果が他方本願と頼む気になるのである。

自分も他人も人間すべてが信じられぬ。小十六に捨てて大きな真理のなかに一身を投入するこの喜びが阿弥陀仏信仰というものでなからうか。

（こういう理屈をこねまわしていることからして概に寒かなことである。理屈によつては信仰は築れない。信仰

は一種のバベルの塔である。理屈の地上をこみ立ててこまじめに信仰の天に入ることができるのであろう。

一枚起請文はこの事を簡単に率直に記して気魄にみちた名文章である。瀕死の病床に居られてこれだけの気魄のあつた上人といふ人は、まことに仰ろしりような方であらせだ。